

## 学校・部活動における重大事故・事件から学ぶ研修会

【第1回】 10月12日(金) 18時00分～20時30分(世田谷・記念講堂)  
テーマ：ASUKAモデルと、救える命を救うことの大切さを考える研修会

【第2回】 11月7日(水) 18時00分～20時30分(世田谷・記念講堂)  
テーマ：部活動中の重大事故と体罰の問題について考える研修会

【第3回】 12月13日(木) 18時00分～20時30分(世田谷・記念講堂)  
テーマ：「いじめ」「指導死」の問題について“本気で”考える研修会

### 【第1回】 ASUKAモデルと、救える命を救うことの 大切さを考える研修会

- 桐田寿子さん(桐田明日香ちゃんのお母様)
  - 桐淵博先生(日本AED財団理事)
- コーディネーター：鈴木健介先生(保健医療学部准教授・救命救急士)



#### 《概要》

2011年9月、小学6年生の桐田明日香ちゃんが駅伝練習中に倒れた。教師たちは明日香ちゃんの心臓が止まっているとは思わず、AEDを使わなかった。この事故の反省を踏まえ、さいたま市教育委員会とはご遺族とともに、「体育活動等における事故対応テキスト：ASUKAモデル」を作成した。現在、同テキストは全国の自治体に「救える命を救う」ための教材として広がっている。

この研修会では、明日香ちゃんのお母様、そして当時市の教育長でありながら、明日香ちゃんの死に向き合い、同様の悲劇を生み出さないため遺族と心をつなげて歩んできた桐淵博先生をお招きし、さらに本学

鈴木准教授によるミニ実習会も交えながら、命の大切さ、「救える命」とはどういうことであるか、そして、スポーツ中の事故にどのように対応すべきかについて、学ぶことを目的とする。

### 桐田寿子さんの講演



桐田明日香ちゃん

「皆様の心に届けられるように、明日香のメッセージを母親として伝えようと思います。」

桐田さんの講演は、この言葉から始まった。明日香ちゃんのプロフィールとともに顔写真がスクリーンに映し出され、参加者らはその愛らしい笑顔に思わず目を細めた。

看護師という職業を持つ

桐田さんはその職業柄、寂しい思いをさせることも少なくなかったと語るが、明日香ちゃんは明るくスポーツ万能、元気いっぱいの優しい女の子に育ってくれたという。しかし、明日香ちゃんが小学校6年生の時、突然の事故は起こってしまう。

「2011年9月29日、明日香は駅伝の選考会で突然倒れ、痙攣を起こしました。救急車の要請は倒れてから約4分後、救急隊到着時には心肺停止状態でした。救急隊が到着するまでの約11分間、AEDの使用を含む救命措置は、まったく行われませんでした。」

私たちが明日香と会ったのは、ICUの中でした。『うち、駅伝の練習頑張るね。ママ、大好き。』と、はじけるばかりの笑顔で家を飛び出して行った娘の姿は、そこにはありませんでした。『明日香、どうしたんよ。今朝だって旅行に行くって言ってたじゃない。どんな姿になったって、ママは明日香を待ってるよ。答えて。』との声掛けに、明日香は両目から涙を浮かべ、左のまぶたから大きな涙が二粒流れ落ち、私の手で受け取ることができました。」

桐田さんは、多臓器不全や脳浮腫が進行して生命の維持が困難になった明日香ちゃんに、「1秒でも長く一緒にいたい」との思いで、懸命に胸骨圧迫を続けたという。それに応えるように明日香ちゃんは、一度は心拍を取り戻すなど、最後の1秒まで精一杯生き抜いてくれたものの、永遠の別れはやってきてしまう。

「明日香の死は、お腹に明日香という命を宿してから、誰よりも長く一緒に生きてきた母である私にとって、受け入れられない辛い現実でした。もし、叶うのであれば、自分の命を差し出してでも、明日香の命を救えるのであるなら、迷わず私はその道を選んだでしょう。しかし、かなわぬ現実と直面する中、一つずつ現実を受け容れて、明日香の願う、『みんなを守れる学校』という思いを胸に、再発防止のための活動を行いたいとの気持ちを胸に、明日へ希望を繋ぎました。」

そこから桐田さんは、当時のさいたま市教育長であった桐淵博先生と手を取り合い、その後多くの人々の命を救うこととなる『ASUKAモデル』の作成に取り組むこととなった。

「明日香が倒れた時に、AEDを含む心肺蘇生が行われなかったことは、意識がないことを教員のサイドが分からなかったこと、『脈あり、呼吸あり』との情報から、安心してしまったことから、重大事故としては判断できなかったことが原因として挙げられました。重大事故としての認識ではなく、『生きている』証拠探しに徹してしまっていた11分間でした」。

こうしたことの反省と、「二度と同じ過ちを繰り返してはいけない」ということを強く決意して、「ヒューマン・ファクター工学」の手法を取り入れながら誕生した『体育活動等における事故対応テキスト～ASUKAモデル～』は、意識や呼吸の判断に迷ったらすぐに胸骨圧迫とAEDを使用するよう促す「行動チャート」が掲載されており、学校関係者が、重大事故発生時にどのような行動をとるべきかを学ぶことのできる、きわめて実践的な内容となっている。このテキストは、さ



<https://www.city.saitama.jp/003/002/013/index.html>

いたま市のホームページ(上記URL)から入手可能であるため、教職員や教員志望の学生においては、必ず目を通しておくことを勧めたい。

そして講演の後半で桐田さんは、学校での事故で最愛のわが子の命をなくすという最悪の事態に見舞われた遺族が、学校側の心ない対応によって深く傷つけられ、一時は裁判しか進む道がないとまで思い詰めていたことを明かした。

「そんな私達遺族は、なぜ今、学校や教育委員会との信頼関係の下、こうした活動を続けているのでしょうか。それこそ、桐淵先生がさいたま市の教育長だった時に行ってくれた対応です。」「直接、教育長と話しがしたいという私達遺族の要望が出されている中、当然、教育委員会内でも反対意見があったと思いますが、最終的に、桐淵教育長自身が決断し、自宅に、一人でお越し下さいました。最初の一言が『今日は、一人の人として来ました』という言葉でした。そして、『元気に学校に来た明日香ちゃんを無事に帰すことができずに、申し訳ありませんでした』と、真摯に私達遺族と向き合う姿勢と、謝罪の言葉がありました。明日香が亡くなってから、初めての謝罪の言葉でした。その言葉と内容には、遺族に寄り添う心がありました。私もその言葉を聞いて、大泣きをしました。ずっと、ずっと張り詰めていた心の緊張が取れた感覚でした。」

この時から、桐淵元教育長と桐田家との協力関係が生まれた。「学校を、子どもを守る場所にする」との願

いが一つになり、やがてチームとなって、ASUKAモデルが生まれ、政令指定都市としては初めて、さいたま市立全ての小中高等学校で、ASUKAモデルを活用した心肺蘇生の授業が導入されることとなった。小学校での救命講習は、文科省の調査では全国で3割くらいの学校で実施されているということだが、自治体レベルで正式なカリキュラムとして定めて教員が指導しているのは、現在、福岡市や上尾市などまだ一部であるという。桐田さんの講演は、次の言葉で結ばれた。

「2015年10月16日、JRC蘇生ガイドライン2015が発表されました。これは、国の救命の基準になる重要なガイドラインです。多くの願いを共有する絆に支えられて、ASUKAモデルが大切な一次救命の部分で採用されました。大切なのは、このガイドラインが現場で根付き、活用されることで、救命につながることで、やはり、ここにいらっしゃる皆さんの力が必要になります。これは、明日香が5年生の時に書いた短歌です。『楽しみは きれいな一輪のタンポポが 綿毛になって 飛んで行く時』。

私の講演は、皆様の心に『想いの種』を送ります。その『想いの種』が皆さまの心で育ち、まさかの時の勇気と行動につながることを願います。明日香の表現を使ってみると、私の蒔いたメッセージが、タンポポの綿毛とともに『想い』という種として優しく飛んでいき、人々の心に着地し、想いの力で芽を出し、育っていく、そんなことをふと考えました。ASUKAモデル、それは『みんなを守れる学校にしたい』という願い、想いの種です。どうぞ、この種が皆さんの心に届けられるように、そして、タンポポの綿毛と一緒に届けられるような優しい風を絶やすことなく、講演という形で吹かせて行きたいと思います。」

## 桐淵博先生の講演

「明日香ちゃんの事故は教育長在任中のことでした。当初は、先ほどもお話にありましたように対立関係にありましたが、今では桐田さんと協力して、『子どもの命を守りたい』という思いを共にして、ASUKAモデルでBLS、Basic Life Support、一次救命の普及活動に取り組んでいます。現在、桐田さんとは『同志』、あるいは『盟友』のような関係です。私は教育長を辞めた後、埼玉大学で教員をやっておりましたが、そこで一緒に学生に講義をしたり、全国各地を講演活動で回っております。最近では『ASUKAモデルを学んでいたお

陰で、命を助けることができた』というお知らせをあちらこちらから聞けるようになり、本当に嬉しく思っております。私は『臨床救急医学会』という学会に加入させて頂いて、また『減らせ突然死実行委員会』、現在は『日本AED財団』に所属し、そこで活動させて頂いております。私が皆さんにお話しすることは、全て明日香ちゃんの事故後に学んだことです。この中のどれか1つでも、明日香ちゃんの周りにいた教員が知っていたら、きっと対応は違っていただろう、と思います。」

本講義の意義

○近年の医学は、人が倒れた時に周囲にいる人のBLS(Basic Life Support=一次救命処置)が決定的な役割を果たすことを明らかにしてきた。

**その場ですぐに 誰もが 協力して**  
⇒しかし、その意義や方法が  
皆に理解されているとは言えない。

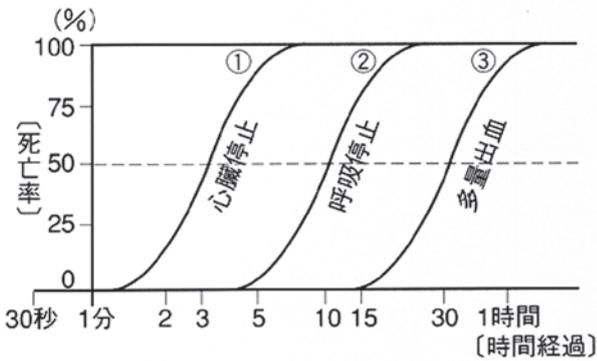
○教職課程で救急処置を学ぶのは養護教諭(守るため)と保健体育科教諭(教えるため)のみ。  
⇒それでは足りない。誰もができるように制度改正が必要。

**養護教諭、保健体育科教諭はリーダーに**  
↑残念ながら両者にも徹底しているとは言えない。

桐淵先生は冒頭で、一次救命処置の意義や方法が必ずしも周知・理解されていないことの問題意識を述べられた。そして、本研修会の参加者には教員志望の学生が多いということで、「教員が教員免許を取る時に救命処置について学ぶことは当たり前」としたうえで、教員養成課程で学ぶ内容は質・量ともに不十分であると指摘された。

そして、次ページにある「カーラーの救命曲線」を示し、心停止の場合には1分程度で、あっという間に手遅れになって亡くなってしまおうとし、「この短時間では、医療関係者が患者に触れることはできない。日本では救急車が現場に到着するまでに平均8.5分かかかる。この8.5分の間に何もしないと、たくさんの命が失われてしまう。」として、この「カーラーの救命曲線」は資格のあるなしに関わらず、「市民の皆さんが是非救命処置を学んで欲しいということを主張するための根拠となっている」という。

そして、心臓が止まった時に最初に影響を受けるのが「脳」であるとして、胸骨圧迫を行うことで、心臓内の血液を脳に送ることが大切であるとされる。



- ① 心臓停止後約3分で50%死亡
- ② 呼吸停止後約10分で50%死亡
- ③ 多量出血後約30分で50%死亡

**AED (Automated External Defibrillator)**  
「自動体外式除細動器」

- ・日本では2004(平成16)年 市民による使用が認められた。
- ・日本では医療機関や消防機関を除いた市民向けのAEDが推定約60万台が普及。世界一だといわれている。
- ・突然の心停止に対して、胸骨圧迫(心臓マッサージ)と組み合わせて救命の決定打となる。
- ・倒れた現場を目撃されても市民による応急処置を受けない場合の1か月後生存率は9.3%、何らかの応急処置を受けた場合は16.4%、さらにAEDによる電気ショックまでできた場合は53.3%に跳ね上がる。
- ・しかし、倒れた現場を目撃された人に対する市民による電気ショック実施率は4.7%(装着はもっと多いはずだが)。直ちに胸骨圧迫を行い、早く装着すれば、生存率は大きく上昇するはず。

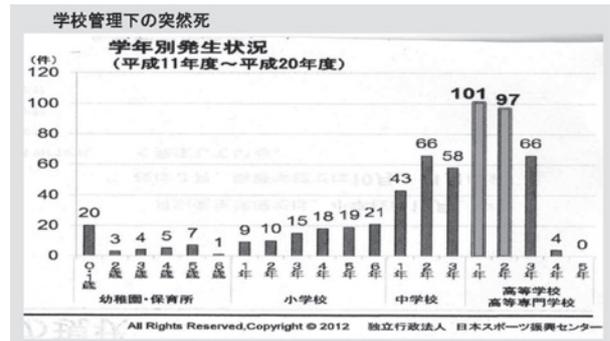
※消防庁「平成29年版消防白書」より平成28年の数値

そして、一次救命においても一つ大事なものがAEDであり、2004年から医療従事者だけでなく、市民も使えるようになったものの、なかなか実際には使われていないという現状について触れられた。次に、AEDの仕組みについて「心室細動」とはどのようなものであるかについて分かりやすく説明された上で、「AEDは心臓が震えている状態、心室細動の状態に反応するようになっている」「心室細動であるかどうかは機械が判断してくれるので、迷った場合には躊躇なくAEDを使用して欲しい」と強調された。その際、実際に救命が行われた事例の心電図の状態とAED装着前後の周辺の音声流された、救命の現場の切迫した状況が伝えられた。

そして、明日香ちゃんの事故当時の状況について触れ、「その時、現場にいた教員は全員救命講習を受けていた。8人教員がいて、1人教育実習生がいた。それなのになぜ全員、胸を押さず、AEDも装着しなかったのか、疑問だった」とされる。その疑問は、検証委員会等の議論を経て、「救命講習がただ技術の習得だけで終わっては機能しない。突然死の実態や実例を学ぶリアルティのある研修が必要だ」という気付きにつながった。そうした視点から、明日香ちゃんの事故の

前後にも全国の学校現場で同様の事故が何件も起きていることを、実際の新聞記事を用いて紹介され、「学校生活で起きる突然死の多くは運動に関係している。そのため、中学生と高校生でぐんと増えている。中学校、高校で3年生が少なくなっているのは、部活動を引退していることが関係している」と指摘された。当時教育長であった桐淵先生はこうしたことを全く知らなかったとし、「全国の教員が、学校の中で子どもたちが亡くなるのは突然死が一番多いということを知ってだけ知っているか、これが大きな課題」だという。

しかしながら、法制度が変わったり、AEDが普及したり、医学の進歩などによって、確実に死亡事例は年々減少傾向にあるのだということ、スポーツ振興センターが出している複数のグラフを用いて説明され、「私たちの目標は、学校における突然死をゼロにしたい。プラス、スポーツにおける突然死もゼロにしたい。決して夢ではないんだ。」と話された。



下のスライドは、明日香ちゃんの事例を桐淵先生が分析した結果として示されたものである。一般の人は「痙攣や死戦期呼吸」についての知識がないこと、そして脈を取って確認しようとしても、誤認したり、そもそも意識を失って血圧が下がっているため脈を探ることができないなど、時間のロスにつながるため、救命措置のステップの中からは外されているという、重要な指摘がされた。

**明日香ちゃんの事故の教訓 判断・対応に影響すると思われる諸点**

<緊急時の判断・対応能力の問題>

- ①痙攣や死戦期呼吸が心停止の重大なサインであること、そもそも死戦期呼吸のものについての具体的な知識がないこと
- ②非医療従事者が混乱した中で脈をとることは困難かつ誤認やCPRの遅れにつながる危険があり推奨されないことが不徹底であること
- ③AEDには診断機能があり、とるべき行動を指示することへの理解が不足していること

<学校の危機管理体制の問題>

- ④各学校の危機管理マニュアルはほとんどが大雑把なフロー図であり、具体的な命令系統の確立や傷病者に関する情報の管理、事故の種別に対応した動きのポイントの確認、それらを含めた要請に体を動かして行う対応訓練が不足していること
- ⑤一般に「養護教諭は医療従事者である」との認識があり、養護教諭の到着をひたすら待ち、かつ駆け付けた後はすべて任せきりにしてしまう傾向があること

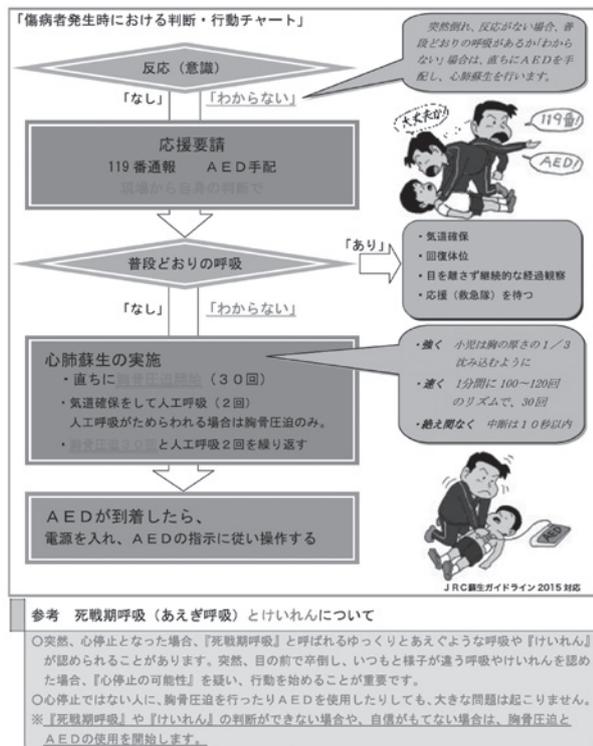
<教職員の危機意識の問題>

- ⑥教員は普段元気な子どもたちと接しており、突然目の前の子どもが死に直面する場面を想像しにくいこと
- ⑦「事故対応は専門外」という意識が強いこと

⑧緊急事態を経験したり適切に研修を重ねたりした教員がいない場合、複数の目はかえって「まさか」「あんなに元気だったのだから」といった「多数回調バイアス」による「正常性バイアス」の強化を惹起する危険があること (桐淵まとめ)

学校では、災害発生時の対応や避難訓練などは行うが、実際に子どもが倒れた時にどうすべきか、教員間の役割分担などについてはまったく取り組まれていなかった。そのため、明日香ちゃんが倒れた際に教員たちが適切な行動をとることができなかったという反省点を踏まえて、下に示す「傷病者発生時における判断・行動チャート」が、ASUKAモデルには組み込まれている。

ここでは紹介しきれないものの、それ以外にも、桐淵先生はたくさんの実例や実証データなどを駆使され、心肺停止時における胸骨圧迫・AEDの使用についての説得的な説明とともに、「誰でもやれることをやる勇氣」の大切さが伝えられた。



## 救急救命実習

第二部として、本学の保健医療学部准教授で救命救急士である鈴木健介先生から、「隣の人の呼吸を確認する実習」や「ペットボトルを用いた胸骨圧迫の実習」を行っていただいた。とりわけ後者の実習では、一人の人が担当すべき「2分間の胸骨圧迫」を参加者全員が実際に行ってみることで、救命救急をリアルに体験することができた。なお、「2分間の胸骨圧迫」の根拠としては、胸骨圧迫開始から60～90秒で疲労が蓄積し始め、胸骨圧迫の質が低下したという研究結果があるため、2分間を境に次の人に交代することが望ましい、

ということである。(詳細は研修会報告2を参照)



## 参加者の感想

### ○ 桐田さんへの感想

- 桐田さんのお話を聞いて、命の大切さについて改めて考えることができました。私は、大学を卒業したら教員になりたいと考えています。ASUKAモデルにあるように、みんなを守る学校を教員が行動して作っていかねばならないと思いました。助けられる命を救えるようにAEDや心肺蘇生などの講習会には積極的に参加していきたいです。
- とても辛いことなのにそれを乗り越え、命の大切さを伝えておられて、とてもすごいと思った。私も同じような状況になったことがあり、なかなか立ち直れずにいましたが、命の大切さを改めて感じ、前を向こうと思いました。
- 今日のお話を聞いて、改めて教員は勉強を教えるだけでなく、生徒の命を預かるということでも大切な役割をもっているのだと実感しました。生徒が1日のほとんどを過ごす学校の中で安全を保つということがどれだけ大変なことなのかと考えさせられました。
- 死戦期呼吸というものが心停止という重大なサインであり、きっとこのお話を聞いていなければ、私も教職員になった時、間違った判断をしてしまったと感じる。桐田さんのお気持ちを考えるとすごく辛い出来事ではありますが、明日香ちゃんの大切な命を絶対無駄にしないように常に頭に入れておこうと思います。
- 今日、この研修会から命の大切さ、命の重さ、日々への感謝を改めて感じ、今、私たちは生きていますと学びました。
- 自分は1999年生まれで、明日香ちゃんと同じ年です。自分が小学校6年生の時、このようなことが起

こったことをまったく知りませんでした。自分もしかしたら、明日香ちゃんの担任の先生の立場になるかもしれない人間です。もし教員になれたら、教育だけではなく命を預かっているということを忘れずに救命の方法をしっかり学んだ上での教員になると思いました。

### ○ 桐淵先生への感想

- 1分1秒が命を決める時がある。その時の行動が大切だということを教えて頂きました。悲しい事故から学んだお陰で救えた命もあることも知ることができました。これからも頑張ってください。
- 実際の映像を見て怖かったが、人の命を助けないといけないと思った。話と映像を見て聴いて、ここには書ききれないほど、自分の中でいろんなことを思いました。教員になったら、ASUKAモデルで自分の心が動かされたように、生徒たちにも教えてあげたい。とてもためになりました。
- 将来、教員を志す者として、誠実な対応の大切さ、子どもと向き合う大切さ、学び続ける大切さを感じました。学校現場で子どもの命を守れるよう、大学で確かな知識、実践力を身に付けられるようにしたいです。
- 1人でも救える命があることを知り、「教師＝子どもの成長を支え、守る」立場として、必ず行動に移そうという決意ができました。また、教師間の連携、知識の周知も促して行ける存在になりたいと思いました。
- 桐田さんご家族への対応の温かさ、現在もこのように活動を続けておられる姿勢に、たくさんのことを学びました。
- AEDが電気ショックが必要かを判断してくれるということを改めて理解することができました。どうすればいいのか分からない時は、とりあえずAEDをつける、胸骨圧迫を開始するということを知りました。児童の死亡原因の中でも突然死は断トツで多いということを忘れずに、定期的に講習会を受けようと思いました。ありがとうございました。

### ○ 救急救命実習、その他の感想

- 2分間の胸骨圧迫でしたが、とても疲れました。ですが、これで人の命が救えると考えたら、疲れても止めることはないと思います。この経験を活かせる時がくれば、率先してやりたいと思います。
- 今回の講演をきいていつでも起こり得ることだということが分かりました。いつどこで誰が倒れるか分

かりません。大好きな友達が、大好きな人が、大好きな両親が、そして、未来に生まれるわが子が心肺停止状態になるかもしれません。その時に、素早い行動ができるよう、もっと勉強したいと思います。

- 「あり・なし」ではなく、「なし・分からない」という判断法はとても良い考えだなと思った。
- 自動車免許の時にしたことがあったが、久しぶりにしてみると2分間なのにととてもきつかった。替わりながらやるのが心肺蘇生を続けるため、大事なことだと思った。
- 人を助けられる人になりたいです。たくさんを知り、勇気ある行動をしたいです。
- この実習はスゴクわかりやすく非常にためになりました。今回の研修会においてはたくさんの方が学べました。また次の研修会にも参加し、たくさん学びたいと思います。
- 何回も胸骨圧迫をしてきたが、音楽に合わせて、また、こんな大人数でやるのは初めてだったので楽しかった。
- 呼吸の確認をペアで行った時、呼吸をしているのか、何回呼吸しているのか、判断するのが難しかったです。心臓の音を感じながら鼻・口を見た方が分かりやすかったです。胸骨圧迫は2分間で、とても体力が必要と感じました。今日の研修で初めて知った「記録を書く」ということを忘れずに、まず家族に教えたいと思います。
- 心臓が動いている人に対して心臓マッサージをすると逆に良くなって、死に至りやすいとずっと今日まで思っていました。しかし、私の考えは間違っていて、内臓に傷をつけるということもなければ、その行為をしたために死ぬこともないと聞いて、安心しました。これからは、いつどこで何があっても、命を助けられる人になりたいと思いました。

## 【第2回】

# 部活動中の重大事故と体罰の問題について考える研修会

- 中村周平さん／淳さん
- 谷豪紀さん
- 村川弘美さん

## 【Session 1】

### ラグビー部活動中の頸椎損傷事故

#### 《概要》

2002年11月、高校ラグビー部の練習中、当時2年生であった中村周平さんは、ボールを味方にパスして地面にうつぶせに倒れ込んだ時、他のプレイヤーが上に乗ったことで、頸椎損傷の重傷を負った。首から下が思うように動かなくなってしまったものの、希望を捨てず、様々なリハビリを経験して学業に復帰。現在、同志社大学大学院でスポーツ事故と補償の問題について研究を行っている。

## 中村淳さんの講演

### 今、ラグビー事故当事者家族として語る

#### ～失望から希望へ～

周平さんのお父様である淳さんは、元小学校教諭である。淳さんは、「当事者というのは、私達家族はもちろんですけど、サポート頂いた関係者や保護者の方々もすべて当事者として一緒に考えて行こうというのが、私のスタンスです」と語った。

「17歳の誕生日を迎えようとしている息子が生きることによって『失望』しないで、『希望』をもてるようになってほしい」という思いを、事故当時から今現在までも親として持ち続けているという。

「事故が起こった後の、2002年11月17日正午、ラグビーの練習試合中に起きた事故。すぐに救急車で京都の病院に運ばれました。たまたまその時、息子と同じ怪我をした人がおられて、その手術を待っていたため、夜中に手術が始まって、夜中に終わりました。ドクターは『手術は成功しました』と言いました。しかし、周平が負った障害、頸椎損傷は、体幹・自律神経・知覚神経・運動神経麻痺、それまでと身体がまったく別のものになってしまったのです。『頸椎損傷による四肢麻痺、首から下が動きを取り戻す可能性は7%』。『可能性のない希望を持たせることはいたずらに遠回

りをさせるだけ』『一生、全介助・・・退院後は誰が看るのか』以上です。この言葉を、ドクターが私に言ってきました。それも、手術が終わった後です。まだ彼は16歳。この言葉を実は、息子には半年以上伝えられませんでした。」

周平さんが集中治療室での朦朧とした意識の中で、「カラダを起こして！前へ！前へ！こんなことしてたらボクはダメになる！」と言った言葉が忘れられなかった。そこで淳さんは、機能回復の可能性を信じ続け、何とか「希望」につながるあらゆる情報を集めようとした。そして、周平さんと同じように頸椎を損傷した鍼灸師と出会い、病院側の配慮によって、周平さんの入院する病院での施術を受けられるようになった。また、脊髄・頸椎損傷者の回復を支援しているトレーナーが小樽にいと聞いたり、さらに日本脊髄基金のスタッフからアメリカのサンディエゴで脊髄・頸椎損傷者の回復を目指すトレーニングジムがあるということを教えてられたりしたことで、希望をつないだ。そして地元の京都でも、在宅後のリハビリ継続を支援してくれる理学療法士に出会い、復学にも力を貸してくれるということになった。そこから退院が決まり、自宅で父母が24時間付き添うという生活が始まった。

しかし、やはり在宅での生活は容易なものではなく、自宅のリフォームや車の改造、車いすの購入と改造などと、お金が次々と必要となった。「そこで、学校の保護者の方が、『2002周平の会』というのを学校で立ち上げ、そこで基金を集めて頂きました。色んな人が関わって、在宅生活に入っていきます。」

退院二日後には小樽行きを計画する。しかし、当時は飛行機に乗ることさえハードルが高く、国内二大航空会社のうち1つからは搭乗拒否にあう。もう1つは一度拒否されたもののしつこく食い下がり、ようやく「ドクターの同意書付なら」との条件で乗ることができたという。

さらに退院一年後には、アメリカ行きを計画。今度は日本の航空会社とは異なって理解を示してもらえ、対応も全く違ったという。むしろ「頸椎損傷のことが知りたい」という姿勢で、「航空会社がそこまでやってくれるんだ、とビックリしました」と淳さんは振り返る。

退院後も多くの人々に支えられて生活を送る中で、周平さんの血圧や呼吸が安定するようになってきた。実は退院後6か月間は車いすに座ることもできず、ほぼ1分間で気絶するという状態だったという。訓練によって、徐々に車いすに座る時間も増やしていき、1年、

2年が経過する頃、ようやく現在のように長時間車いすに座ることができるようになったのだそうだ。

「そして、ドクターは『絶対に動かない』と言っていました。まったく動かなかった腕が少しずつ動くようになりました。今や電動車いすの操作が可能になり、補助具をつけて食事することが可能になりました。身体状態が改善したことで、彼の心も前を向いたのだと思います。」

他方で、父母が24時間交代で昼夜を問わず介護を行うという生活には、やはり限界が来たという。すると、何と周平さん自身が両親に黙って福祉事務所に行き、「母を寝かせて下さい」と交渉したことで、夜間泊りがけでヘルパーが入るようになった。さらに周平さんは「母の職場復帰なくして僕の社会的自立はない」と言い出して、母親の復職を勧めてくれた。

「そして、『大学院を卒業したら一人暮らしがしたい』と、すごい、ビックリするようなことを言い出しました。そうして今、そういう形で自立しています。」

この後、「妻と共に考えた」という周平さんに宛てた手紙が読み上げられた。その手紙は「事故は不運なことでしたが、その後は『出会い』に恵まれた15年間です。よき師、よき友人、よき支援者に導かれ支えられ、今日の日が迎えられたことに感謝いたします。そして、どうか どうか これからもよろしく願い致します。」と結ばれた。

## 中村周平さんの講演

### 私が皆さんに伝えたいこと

#### 一元ラグーマンからの報告一

周平さんは冒頭で「僕の話は情報が多いのと、僕自身が、『滑舌が悪いので眠くなる』という素晴らしい評価を受けているんですけど」と述べ、会場の笑いを誘った。

周平さんがラグビー部に入ったきっかけは、「その日たまたまラグビー部の顧問の先生につかまってしまって、20分くらいラグビーの熱い話をされ、くらくらしてしまっただめだという。当初はバレー部に入ろうと思っていたものの、その場で「バレー」を「ラグビー」に書き換えて職員室に持って行ったことを、周平さんは今でもとてもよく覚えている。それからの中学生生活はラグビー漬けとなり、高校でも続けたいという気持ちを自然に持った。

「そこでよかったのは、中学校、高校と、本当にチームメイト、指導者に恵まれました。当時僕は本当に普

通の高校生をやっていました。学校に行って、勉強して、部活やって、友達とコンビニに寄って買い食いしたりして。本当にそこら辺にいる普通の高校生やったんですね。」

そんな部活漬けの高校生活の最中、運命のアクシデントが起きる。その日は前日に先輩たちが引退したため、自分たちがチームを引っ張らなければならなかった。練習試合中、地面に倒れ込んだ周平さんの背中に他のプレーヤーが乗り、「リアルに、骨の音がした」という。このアクシデントにより4番目の頸椎を骨折。そのため身体に様々な不具合が起きるようになる。

「まず、運動神経です。皆さんが体を動かしているのは、脳からの『こうやって体を動かそう』という指令が首の後ろの神経を通して、末梢神経を通じて身体を動かしてるんですね。それが僕は4番目で命令が止まっちゃうんで、胸から下に『麻痺』っていう症状が残りました。」

そして運動神経だけでなく、自律神経にも大きなダメージを受けた。特に体温調節がまったくできないことで体温の上げ下げがうまくできなかった。また、知覚神経の損傷により、「痛い」「熱い」「冷たい」などの感覚も鈍くなるために、様々なリスクを負っているという。

それでも周平さんは、「僕はラグビーで怪我を負った。そう聞くと、『ラグビーって危険なスポーツやな』『それってスポーツとして大丈夫かな』とか思われる方がいると思います。確かにラグビーは結構怪我します。なかには死亡事故というのもあったりして、他のスポーツに比べると、そういったことが多分多いスポーツかもしれません。でも僕は、ラグビーに出会って、すごく素晴らしい仲間ができて、他ではできない経験をさせてもらいました。皆さんも、そういった経験をお持ちだと思います。僕にとってラグビーはかけがえのない存在で、自分の人生でラグビーに出会ったことは決して後悔していません。」と、きっぱりと語る。

そして、医師から「回復の見込みはない」と告げられ、24時間「生きていく上で当たり前のことを、誰かにお願いしなければならない」状態となった周平さんは、意欲を失いそうになる中、必死に活路を見出そうとしていた。また、自分自身が自分の身体をなかなか受け入れられないという葛藤の中、両親との関係もぎくしゃくしてしまう。

「そんな時、自分の支えになったのが、自分と同じ障害を持った方との出会いでした。『自分はこんなふ

うに生活をしている』『こんなふうに仕事をしながら  
生きている』という話を聞いて、先の見えないもやも  
やとした雲がかかっているところに、ぱっと光が入っ  
た気がしたんですね。その時に、ちょうど僕が怪我を  
した2002年、2003年の頃から、いわゆる高齢者の介  
護保険のようなサービスを障害者も使えるようになり  
ました。で、『是非その制度を使って生活を変えてみ  
いひんか?』とその方に言われたことで、僕も両親も  
本当にしんどい中だったので、(生活の補助を)ヘル  
パーの方をお願いすることになったんですね。」

自分と両親だけで過ごしていた24時間に、ヘルパー  
の手が入るようになった。そうした変化の中で、両親と  
の間にあったわだかまりも少しずつ減ってきたという。

そして事故から1年半後、「復学」という重大な決断  
をする。周平さんはその決断を「社会参加を目指した  
最初の一步だった」と振り返る。それでも当時、通っ  
ていた高校はバリアだらけ。様々な交渉を経て、何と  
か学校に通うことができるようになった。

復学を果たしたら、次に行わなければならない決断  
は「卒業後の進路」であった。

「具体的に、この進路というのは進学という形を取  
りました。それは僕の中で、中村周平っていう、もと  
もとあった気持ちを大事にしたかった。怪我をするま  
では、『高校に行って大学に進みたいな、大学の後の  
自分の将来を考えていきたいな』という気持ちを持っ  
ていたのが、車いすになってしまった、障害を負って  
しまったという理由でやめてしまったら、多分これか  
ら何かあった時に全部億劫になってしまうんじゃない  
かな、と思いました。これから何かをやるという時  
に、障害を理由に全部理由をつけて諦めちゃうんじ  
ゃないかな、そういうことを考えた時に、自分がこれ  
までやりたいと思っていたことを、ダメモトで続けて  
いきたいと。そのことを両親に伝えた時に、背中を押し  
てくれました。」

そして2005年4月から立命館大学に進学。大学生活  
にも様々な困難や葛藤があったが、その都度一つ一つ  
乗り越えてきた。そしてその後は同志社大学の大学院  
に進学し、スポーツ事故と補償の問題についての研究  
を続けている。現在は同大学院に所属しながら、NPO  
法人ALIZEという団体を立ち上げている。同団体のホ  
ームページ (<http://www.kyoto-alize.or.jp/index.html>) の  
トップページには、「ALIZEは、誰もが生きていくうえ  
に必要な『福祉』に『音楽』や『スポーツ』『国際交流』  
などを掛け合わせていくことで、これまで関わりが少

なかった様々な立場の人たちの『接点』をつくり、京  
都という街に多様性という価値観を根付かせていき  
たいと思います。」と記されている。

## 参加者の感想

- 今日は貴重なお話をして下さりありがとうございました。普段自分でできていたことがある日突然でなくなるのはご家族も戸惑ったと思うし、何よりご自身が一番つらいだろうなと思いました。それでも、事故の原因となったラグビーを今でも好きだといえることがすごいと思いました。そして希望をもって今の人生を生きられていることに感銘を受けました。
- 医者から「絶対に体が動かない」と言われたにも関わらず、あきらめずに前を向いてリハビリに取り組み、現在自立している姿を見て感動しました。周平さんはとても明るくて話を聞いていて自然に勇気が出てきました。バリアフリーなど、日本の障がい者に対する制度についても改めて考えさせられました。
- 当事者の話を聞き、事故の怖さというものを感じました。ただ、そんな逆境の中でも前を向いて生きている周平さんの姿を見て、逆境に立ち向かう勇気であったり、希望をもって生きる大切さを学びました。またスポーツでの事故を起こさないためにできる限り予防するとともに、起きてしまった後のことにも関心を持つべきだと感じました。
- 周平さんが「今やりたいことを諦めたら、何もできなくなってしまうのではないか。」とおっしゃるように、自分自身もいつ事故にあってもおかしくないの、人生後悔のないように色々なことに挑戦する勇気をもらいました。
- 今回の話を聞き、私たちがどれほど自由な生活をしているかを改めて感じる事が出来たとともに、日々の大切さを感じました。
- 自分は自分に自信が持てなくて不安な気持ちになることが多いけど、それを言い訳にしない人生を送っていきたいと思いました。
- 私は今、大学生活を送る中で「明日これをして」ということが生き甲斐になってくるということをお話を聞き改めて感じました。もし自分が、自分の子どもや将来の生徒が“生き甲斐”を失ってしまった時、どう支えていくか、“希望”を伝えるか、お話を聞いて思うことがたくさんありました。
- 普段何気なく生きていたけど、生きるという本当の

意味は何なのかを少し気付きました。自分もいつ何が起こるかわからない状況の中で何を目標を持ってこれから社会に出ていくか考えるきっかけになりました。また、挫折や不安が訪れた時にどんな困難で不利な立場や状況でも決して希望は捨てず、頑張っていこうと感銘を受けました。

## [Session2]

### 部活動における体罰指導—当事者の思い

#### 《概要》

2012年12月大阪市立桜宮高校で、当時バスケットボール部の主将が顧問からの体罰を苦にして自殺しました。谷さんは、この主将の先輩部員として、同じ顧問の指導を受けていました。当事者として、経験者として、部活動における暴力的指導は許されないとの思いを、日体生に向けて率直に語って頂きます。

## 谷豪紀さんの講演

### 桜宮高校バスケットボール部で感じた指導死を引き起こす部活環境とは

谷さんは、「知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、桜宮高校っていう大阪の高校があります。そこのバスケットボールの部活動で2012年に起きた、いわゆる『指導死』という、指導が原因で起こった自殺という事件がありました。その時私はちょうど桜宮高校を卒業していて、自殺した子の2つ先輩になります。私が3年生の時に彼が1年生でした。そういった経験をしましたので、その話をしたいと思っております」と、講演を始めた。

谷さんによると、桜宮高校は普通科と併設して体育科、スポーツ健康科があり、当時谷さんは体育科に所属していた。体育科は部活動が強く、エッサツサやキャンプ実習などがあり、日体大出身の先生が中心となって作られていた。事件の直後に大阪市教育委員会が全校生徒に対して行った調査の結果、2つを除くすべての部活動で顧問による体罰と称する暴行や暴言が横行していたという。

ここで谷さんは、最近「体罰はダメだ」という声が増えるが、「何でダメなの？」ということが腑に落ちている人は、実は少ないのではないかと語る。「だから、今日皆さんに話したいのは『どうして、なぜ体罰はダメなのか』というところですよ」。

次に谷さんは、自殺した生徒の特長について、「中

学時代から大阪市内でも指折りのプレイヤーでした。でも非常に謙虚で人懐っこく、入学した時からそうでしたが、責任感のある素晴らしい人格でした。で、悪口は絶対に言わないし、苦しい時こそ笑顔で鼓舞できる、『やっぱこいつはスゲーな』というような選手でした。ご家族も、本当に息子さんたちが純粋にバスケットを楽しむということだけを願っている。本当にバスケットを人生の楽しみの一つの要素として考えている、素晴らしいご家族でした」と語る。

そして谷さんは、本件の「概要」だけを見ると、「体罰が嫌なら部活を辞めりゃいいじゃん」「嫌な環境なのに、なんで逃げないんですか」と思われがちだと指摘する。「私も、この事件を経験するまで、正直、そのような意見だったんですね。加えてよく言われるのが、『それってそもそもその人が、人としてすごく人格が弱かったんじゃないのかな』というもの」。そうした偏見が非常に根強いため、今日ここではその偏見の「壁」を取り払ってもらうために、谷さんの経験した学校生活を振り返りたいとする。

桜宮高校はスポーツが盛んではあったが、谷さんの所属する体育科には「結構陰湿な雰囲気があった」。そうした雰囲気の中で、部活動ではさらに体罰や「陰湿な罰」が横行していた。陰湿な罰の中には「練習の時に上手くやれって言ったことができなかったから、全員五厘刈り」や、「赤点をとったら全員正座」などの理不尽なものが多くあった。「曲がったことが大嫌いで、理不尽で筋が通っていないことが大嫌い」であった谷さんも、こうした理不尽な罰を受けたことは一度や二度ではなかった。谷さんは、「殴られることによる皮膚的な痛み」はそんなにつらくないが、「連帯責任」によって他の人にも迷惑をかけるということが非常につらかったという。

また、当時過ごしていた寮生活でも、先輩から「嫌がらせ」のような扱いを受けていた。寮に帰れば嫌がらせを受け、朝早く学校に行って部活、昼は赤点を取らないように勉強、夕方から夜まで部活、という生活を続ける中でかなりストレスがたまり、「あらゆるものを捨てて逃げ出そう」とまで追いつめられたこともあったという。「誰かに相談しないの」などと言われるかもしれないが、親には心配を掛けたくないし、友達といっても同じ部活動で監督の奴隷のようにになっている。誰にも相談できる状態ではなかったと振り返る。

谷さんは、自殺という出来事までの後輩の気持ちを押し量り、「体罰の何が悪いかというと、体罰をされて、

反発したら家族や仲間に迷惑がかかる。それを機に理不尽なことをされ続ける。そして逃げ場がない。そして最後の抵抗として、相手の理不尽さを証明する唯一の方法としての自死があったのではないかとする。

「ずーっとその世界に閉じ込められていて、監禁状態で、誰も自分を肯定してくれる人がいないんですね。『お前のプレイはダメだダメだダメだ。』一生懸命やっても『ダメだダメだダメだ』。それに加えて周りの人たちにも迷惑がかかる。でも、明らかにおかしい。俺だって頑張ってるんだ。どうやったら、自分の尊厳を迫害してくる人間が『間違ってる』って証明することができるか。どうやったら『彼らが悪いんだ』って証明できるかってことです。『最後に一矢報いたい』と思うんですね。」

谷さん自身もこうした状況に追い詰められ、四国に逃げようと計画したが、すんでのところ先輩に気付かれ、思いとどまることができた。

「まあ『逃げ出す』というのは、どうせつかまって、『根性がないやつだ』と言われるだけなんですけど、完全に消息を絶ってやれば、『明らかに度が過ぎてたんだな』ということを知ってくれるだろうな、という思いがありました。」

そして同じように、最後に「自分の奪われた尊厳」を取り戻す唯一の方法が、彼にとっては自死だったのではないかと推測する。そして、「ここにきてやっと、『その子が弱かったんじゃないか』という偏見、最初の『壁』が取り払えたと思います。」と語った。「弱い人間だったら、逃げたり死んだりはしない」。自分のことを破壊してくる人間がいる時、自分の親に迷惑をかけてもいいのであれば、違う選択肢でもいいはずだ。しかしそうならなかったのは、彼の責任感があるがゆえの「自責の念」が強すぎたのではないかとする。

また体罰は、生徒の選択肢を奪う環境を作り上げてしまうとも指摘する。

「体罰とか指導死とか呼ばれるものは、一方的な状態ですね。相手が反抗して来ないことをいいことに、攻撃をし続ける」。

そうした一方的な関係性に組み込まれ、追いつめられることによって、生徒からどんどん選択肢が奪われ続けるのだという。

そうした「選択肢を奪う環境」をもう少し分析してみると、そこではまず、「思考をするための自由な時間を作らない」。桜宮高校の時代、土日もなく毎日朝練、授業、放課後の部活でへとへとにさせ、帰れば速

攻で寝る、という生活の繰り返しを生徒に強制することによって「考える」という行動を認めない。そして次に、「子どもが嫌う『恥』と『将来への不安』を罰則にする」ということ。高校生にとって、ましてや毎日部活動に明け暮れている高校生にとっては特に、大学生、社会人というイメージが全然できない。そのため唯一見えている道が、「しっかり勉強して大学生になって、就職活動をして、就職していく」というものだという。そこで部活動を辞めるとなれば、体育科では単位が取れなくなり、唯一見えている道が閉ざされてしまう。自分の人生が見えなくなる、または「親が心配する」。そう考えることは非常にきついため、「部活を辞める」という選択肢もなくなる。

そうした中、部活動では、「恥」や「将来の不安」という、子どもが嫌がる罰がちらつかされる。そうされることで、どんどん生徒の選択肢は奪われてゆく。

「選択肢を奪う環境」は「外の世界に触れさせない」ことで完全なものとなる。当時は外の世界に触れることがなかったため、「逃げる」という手段はそもそもなかった。谷さんは、今行っている「当時の経験を話す」という活動をする前、SNS等で発信を始めたという。それに対するフィードバックを受けてつくづく「本当に外の世界って自由なんだな」と実感したのだという。自分がおかしいのか、環境がおかしいのか、当時は気付くことができなかったことに気づかされたのだ。

こうした「気づき」を得る過程の中で、いい先生との出会いもあった。「全部否定される」選択肢を奪う環境にいた谷さんは、ある先生から「肯定してもらおう」という経験をし、「他の人に迷惑をかける」とか「恥をかく」ということも含めて「自分らしくあるということなんだよ」ということを教えてもらえたという。またその先生との出会いによって、一度はあきらめかけた大学進学道も拓け、現在仕事で携わっている経営学やIT分野に進むことができたのだという。

谷さんは、教員志望の学生に向けて、こう語って講演を結んだ。

「自分のことを肯定してくれて、『自分自身の道を行っただ方がいいよ』と言ってくれた先生のことは、今も非常によく覚えています。ちゃんと『先生自身が自分の世界を持っていて、自分の価値観の中で楽しんでいる』ということが重要で、そういう先生であれば、もし赴任した学校で生徒の尊厳が奪われているような環境になっていたとしても、生徒を救えるのかな、と思います」。

## 参加者の感想

- 気持ちが弱いからではなく、気持ちが強いからこそ自分にたまって行って自殺につながってしまうんだなと思った。部活動の厳しさなどには耐えていける自信はあったが、確かに友達や周りの人に迷惑をかけてしまうというストレスがあった場合、かなり生きづらくなってしまっただろうなと思った。
- 自分も中学校・高校とバスケットボール部に所属していましたが、想像できるようなお話がたくさんありました。自分も教員になった時、上司などが体罰などをもし行っていたら、たとえ良くして頂いている人でも全力で止める勇気を持とうと思いました。
- 自分も正直少し偏見を持っていました。今回のお話を聞いて、実際自分の身になって考えると、間違っていたなと思います。自分の高校の部活でもそのように理不倫なことがあって何回も反発をしたりしました。このようなことは絶対あってはならないと思います。今回のお話を聞いて改めて体罰は人の心を傷つける最悪なことだと思いました。
- 改めて、体罰というのはいけないことだと思いました。その人の人生すべてを壊してしまうものだし、精神的にもダメにしてしまうものだと思います。自分は将来教員になりたいと思っています。そういった教員にならないように正しい知識を身に付け、生徒が楽しめる環境でのびのびとプレーできる、そういった教員を目指していきたくと思いました。
- 私も部活動で嫌なことがあった時、死んでしまえば相手の心にも傷が残らず反省するかもしれないと考えたことがあるので、とても共感できました。亡くなられた方なりの闘い方が死を選ぶことだったんだと思いました。
- 私は教員を目指しており、「自分が空気の抜け道になる」という言葉が突き刺さり、学生には学校という狭い世界しか見えていないとされている中で、近くの教員が話を聞いて肯定してあげる大切さを考えることができました。生徒を助けることのできる教員になります。
- 自分も保健体育の教員になろうと思っています。生徒が思う立派な教師、指導者とは何だろうとすごく葛藤している最中です。谷さんの話を聴き、曲がっていることが嫌いとおっしゃっていたことに共感しました。自分の信念を持って、自分の決めたことややってはいけないことを決めて、それを守り抜く教

員が立派であり、生徒の心にも響くのではないかと感じました。生徒の心は教員の言動によって脆くも強くもなるので、自分の決めたことがブレないよう、生徒と関わっていきたく。

- 体罰は指導力の無さだと思っています。将来、競技をみんなが楽しくできるような指導をし、そのような（体罰指導をする）指導者に勝ち、体罰がいかに情けないかを証明したいです。

### [Session3]

#### スポーツで奪われた命、スポーツで取り戻された絆

##### 《概要》

2009年7月、中学校1年生の村川康嗣君は、柔道部顧問からの「しごき」によって頭部外傷を受け、亡くなりました。周りからの執拗な中傷もあり、我が子を突然亡くし生きる希望を失ったご遺族は、生前から交流のあったプロボクサーとの交流によって身も心も救われました。亡き息子さんが繋いでくれた絆を聞いて下さい。

## 村川弘美さんの講演

### あるボクサーとの絆

「皆さん、こんばんは。私の息子は、柔道部で顧問から暴行を受けて亡くなりました。子どもが亡くなってから、今年で10年になりました。今日、このボクサーの話を見せて頂けるということで、ちょっとウキウキしてきました。息子が亡くなったのは2009年の8月なんですけど、子どもは『はじめの一步』っていうアニメが好きで、私も好きで、男の子だったので『一緒に趣味を持ちたいな』という思いがありました。それで、「実際のボクシングの試合を、子どもと一緒に観に行きたいな」って思ったんです。中学校に入学した時にお祝いを兼ねて、たまたまネットで見つけた2009年5月に八王子であったボクシングの試合を観に行きました。その試合の時に、あるボクサーにリングの上で花束を渡させて頂くという機会を頂いたのです。このボクサーと実際に子どもが会ったのは、その時一度だけです。そして、息子はその年の8月に亡くなりました。」

村川さんは、精悍なボクサーたちがトレーニングウェア姿で自宅に来てくれた時の写真をスクリーンに映した。長男の康嗣君が亡くなった2カ月後、八王子のあるジムに所属するボクサーたちが大阪で行われる試合の遠征の途中で、滋賀の村川家に立ち寄ってくれ

たのだという。この中の一人のボクサーが、康嗣君が花束を渡した荒川仁人さんだ。荒川さんは、ずっと康嗣君のこと、そして悲しみに暮れる家族のことを気にかけてくれていて、以来ずっと次の試合のポスターをくれたり、試合がある度に試合で使ったグローブを「康嗣君にあげて」と、プレゼントしてくれた。

康嗣君が亡くなった年に実家の田んぼで取れたお米は、康嗣君がお爺ちゃんと一緒に作ったものだった。このお米をジムにプレゼントした時、荒川さんは「このお米を食べて、自分たちの体の中に康嗣君が生き続ける。自分たちの細胞になって、康嗣君はずっと生き続けるから、お母さん、元気出してね」という手紙を書いてきてくれた。村川さんは、このことが本当に嬉しかったという。

康嗣君が亡くなってから、未来が全く見えなくなっていた家族たち。しかし荒川さんたちと関わることによって、「次の試合を観に来てください」という約束が重ねられることになった。「子どもを亡くして生きる希望もなくしていた中で、『次、未来にこの試合がある。息子が好きだったボクシングの試合がある。』と、ボクシング観戦をすることが生き甲斐になってきた」という。

また、康嗣君のおばあちゃんも、ジムに所属するボクサーたちがタイトルマッチに臨む際、「勝つ」という願いを込めた「びんてまり」を作り、プレゼントすることが習わしになった。びんてまりは、びん細工てまりとも呼ばれる、滋賀県愛荘町の伝統工芸品である。その名の通り、小さな口のビンの中に可愛らしいてまりが詰まっているという、ちょっと不思議な工芸品だ。ボクサーたちのために思いを込めててまりを作ること。それが、康嗣君のおばあちゃんの生き甲斐となった。

また、康嗣君が生涯でたった一度荒川さんに会った

際、「仁人さん、オーラがある。絶対チャンピオンになるで」と言ったという。荒川さんは康嗣君が亡くなった年の年末に滋賀の家にマネージャーと共に訪ねてきて、康嗣君の仏前に「康嗣、僕はチャンピオンになるで。ベルトを持って、見せに来るからな」と約束してくれた。そしてその約束は果たされ、次の訪問時にはチャンピオンベルトを持って来てくれた。「そのタイトルマッチの時に、勝者に与えられた上衣も一緒に持って来ていただきました。全く物欲がない方で、もう、何でも下さるんです。実家には、普通だったら遺影があって、お花があって、好きな食べ物があって、思い出の品があって、っていう感じだと思うんですが、わが家は『次の試合、次の試合』のポスターがあって、そしてベルトを巻いた時の写真があって、そのタイトルで使われたグローブがいくつもいくつもあって、いつでも賑やかな、康嗣の空間になりました」。



滋賀県愛荘町の「びんてまり」

荒川さんが東洋のタイトルを取った時の写真。荒川さんは帽子をかぶって肩にチャンピオンベルトをかけ、ファイティング・ポーズを取っている。この帽子は、生涯で一回だけ会った時に康嗣君がかぶっていた帽子だという。この時取ったベルトには、「Together with Koji Murakawa」と刻まれていた。このタイトル戦は非常に苦戦した戦いであったが、荒川さんは「康嗣と一緒に戦って取った。だから、ここに名前を刻ませてもらいました」と、こともなげに言ってくれたのだという。また、タイトルマッチの際に着るガウンには、いつも康嗣君の「康」の字を入れてくれた。荒川さんは「ここで康嗣君を感じながら、康嗣君と一緒に戦っているんです」と言ってくれたのだという。



村川さんは、事故後の学校側の心無い対応によって、裁判を余儀なくされていた。田舎では「学校を訴える」などとんでもないことであり、村川家は地域から孤立し、誹謗中傷を受けることもあった。そうした中であって、荒川さんは普通に村川さん家族に寄り添ってくれていたという。

「そんなこんなでこの十年間、特に亡くなった年の1年間なんかは、『追いかけて、もう息子の後を追いかけて』と思っていたけれど、『次の試合、次の試合』ってなると、そんな変な気ももう起こらなくなるんです。『じゃあ観に行こう』『じゃあ次も楽しみにしよう』となり、ボクシング観戦がわが家の家族旅行、わが家のイベントになりました。滋賀から東京の水道橋、後楽

園ホールに何度通ったことか！ でもやっぱり滋賀から離れて、その試合を観た時に、忘れるんです、嫌な事とか。苦しい事とか。忘れて、夢中になって『がんばれー！』って。気づいたら、娘まですごいいきな声で応援していて。そうこうするうち、この十年間で、本当に普通の生活を取り戻せるまでになりました」。



「そして今はもう三十後半になった荒川さんですが、『試合をいつまで続けられるかは分からないけど、一生の付き合いですね』って言って下さいます。息子は柔道の指導者の間違っただけで亡くなったけれど、同じスポーツの、ボクシングのボクサーの存在によって私たち家族は癒されていき、とんがっていた気持ちがだんだんだんだん丸くなって行って、笑えなかった毎日が笑えるようになりました。そして当初『努力なんかしたって、お兄ちゃん死んでしまうやん』って言ってた娘が、荒川仁人さんによって、『人が努力するって素晴らしい』『努力するっていいことって、やっぱりいいことやな』って、心から言う日がありました。荒川さんが頑張る姿を見て、応援しながら、私たち家族は心を癒していき、頑張ることの素晴らしさ、生きていくことの素晴らしさを、そして『未来に期待する』そういう生き方を教えて頂きました」。

## 参加者の感想

- 私は、荒川仁人選手のことは知りませんでしたが、ものすごく素晴らしい方だと思いました。機会があれば、荒川選手の試合を観に行き行って応援したいと思いました。
- 人の優しさはその家族をも救うほど大きなものだと思ったので、自分も人に優しく接し、他人の人生を救えるくらい大きな人になりたいと思いました。
- 荒川さんが康嗣君に向けて贈った言葉やたくさんの行動はたった1回しか会ったことないかもしれないけれど、康嗣君の魅力や人間性が伝わったからこそ行動だと思った。
- 私も村川さんがおっしゃっていたように、努力って本当に素晴らしいことだなと思います。今回お話を聴いて改めて感じました。努力をすれば、自分だけでなく周りの人も変えることができるので、努力は魔法だなと思いました。私もたくさん努力し、結果を残し、自分だけでなく周りを変え、助けられるような人になりたいです。なります。
- スポーツが人にもたらすものはすごく大きいものがあると実感することができた。一度きりではあっても、人のつながりは不思議で深いものだなと思った。そして、荒川仁人というボクサーはすごい人だと思った。
- スポーツで傷つけられる人もいれば、スポーツで助けられる人もいるんだなと思いました。事故は起こしてはならないが、事故後に助けることも大切だと思いました。
- 人の優しさって素敵だなと感じました。感動しました。ありがとうございました。
- スポーツマンは人に夢を与え、希望を持ってもらうパワーがあることに改めて気づかされた。ただスポーツをするだけでなく、誰かのために打ち込むこともとても意義深いことであると再確認できた。
- 自分の子どもがもししごきや体罰で亡くなったら、村川さんのように日体大に来て話すということではできないと思う。今年で亡くなって10年。悲しく辛かったと思うが、貴重なお話を聴くことができ良かった。本当にありがとうございました。
- 涙が出てしまいました。憎いはずのスポーツが生き甲斐になる。スポーツを専攻している身として、とても嬉しく思い、胸が熱くなりました。たくさん書きたいことがありますが、うまくあわせません。このお話を聴くことができ、本当によかったです。

## 【第3回】

### 「いじめ」「指導死」の問題について “本気で”考える研修会

- 大貫隆志さん(一般社団法人「ここから未来」代表理事)
- 神戸市立小学校いじめ事件で学校と闘い抜いた父K
- 奈良県橿原市・「いじめ」により最愛の娘を奪われた母M

#### [Session 1]

#### 「指導死」について、知って欲しい本当のこと

#### 《概要》

「指導死」は、学校で、教員からの「指導」の名の下に子どもが精神的・肉体的に追い詰められて自殺するという、誠に痛ましいものです。これによって大切な家族を亡くされた当事者が、その経験を踏まえ、教師が生徒に及ぼす圧倒的な影響力について語ります。教員や指導者を目指す方、現役教員の方に向け、「指導死」とはどのようなものであるのかを知って頂き、「指導」とは一体何であり、どうあるべきかを、ともに考えたいと思います。

## 大貫隆志さんの講演

「今日は『指導死』というのが何かということを知って頂く時間にしたいと思います。2007年にこの言葉を作りました。当時は、生徒指導によって子どもが自殺する、自殺に追い込まれるということが一般的ではなかったために、遺族は大変苦労していました。そこで、社会問題化するために、まず名前を付けるところから始めようと『指導死』と名付けたのです」。

大貫さんは、2000年に教師の指導によって追い詰められ、自ら命を絶った次男・陵平君の話から始めた。陵平君は、当時中学2年生で、スポーツが大好きで、明るくて人懐こい性格の、自殺のイメージとは程遠い存在だったという。2000年9月29日の昼休み、学校のベランダで、一人の生徒が「ハイチュウ」というお菓子を食べていた。その生徒が廊下に出た時、向かい側から歩いてきた生徒指導主任がお菓子のにおいを嗅ぎつけ、「なんか食べているだろう」ということで見つかった。そして、帰りのクラス会で「他に食べた子はいないか」と問いただすことにより、合計9名の生徒が特定され、別室に集められた。この9名を取り囲む教員の数、12名。1時間半の指導によって、最終的には21名の生徒が集められた。その学校では「ルール

違反をすると奉仕活動をする」と決められていたため、「どんな奉仕活動をするのか」を自分で決めて反省文の中に書いてくるように、という指示が出されたという。

翌日30日には、陵平君以外の20名の生徒が反省文を提出し、「今晚、担任から家に電話をするので、先に親に『自分が何をしたか』を言っておけ」と指示が出された。しかし陵平君は、その日はあごに「しこり」ができていたことから、病院での検査の予約を入れていて学校を休むことになっていた。そのため、担任から「不意打ち」の状態、夜保護者に電話が入った。電話に出た母親には、陵平君が学校でお菓子を食べたことや「臨時学年集会で全員の前で決意表明をするように」ということ、親が学校に来るように、などのことが伝えられたという。電話を切って、母親は陵平君に、担任から電話があったとしてその内容を伝えると、陵平君が非常に沈んだ様子であったため、特に問い詰めることもなく、話を手短かに終わらせた。



その40分後、陵平君の兄が大きな音を聞きつけ、母親にそのことを伝えた。変な胸騒ぎを覚えた母親が陵平君の姿を探したところ、12階建ての自宅マンションから飛び降りて変わり果てた姿となっていた陵平君を発見した。大学ノートに1枚破った紙に、「死にます ごめんなさい たくさんバカなことして もうたえきれません バカなやつだよ 自爆だよ じゃあね ごめんなさい 陵平」という遺書が書かれていた。机の上にはもう一枚、学校に提出するために書かれたであろう、几帳面な字でびっしりと綴られた反省文が置かれていた。

当初こそ「バカなことをして」と陵平君を責める気持ちだった大貫さんは、陵平君の死の2週間後くらいから「違うんじゃないかな」と思い始めたという。「陵平をそこまで追い詰めたのは一体何だったのか、ということ、父親として私は確かめなければならないな、

というふうに思ったわけです。」

そして、遺族が集まる会で同じような形でお子さんを亡くされた三組の遺族と出会い、これまでは「陵平の身にだけ起きた特別なこと」だと思っていたのが、そうではないということに気付くことになる。生徒指導をきっかけにして命を失った子どもたちがこんなにいるということ、この事実を皆に知ってもらわなければ問題の解決には至らないと考え、「指導死」という名前を考え、同じタイトルの本を書くことになった(写真参照)。

大貫さんは、「どんな指導が子どもを自殺に追い詰めていくか」ということを調べていく中で、以下の10項目の教員の対応にまとめられるとする。

- ①長時間の、適切さを欠く「身体的拘束」
- ②複数の教員で取り囲む「集団圧迫」
- ③心理的外傷を負わせる「暴言」や「恫喝」
- ④してもいけないことを責める「えん罪型対応」
- ⑤反省や謝罪、密告などの「強要」
- ⑥連帯責任を負わせるような「いやがらせ」
- ⑦本来の目的から外れた「過去の蒸し返し」
- ⑧不釣り合いに重い「見せしめの罰則」
- ⑨子どもを一人にする「安全配慮義務違反」
- ⑩教育的配慮に欠けた「拒絶的対応」

「指導の時間が非常に長いケースが目立つ。3時間、4時間は当たり前。私が知る範囲でいちばん長いのは、8時間45分というのがあります。それを4人、5人、6人で生徒を取り囲んで指導する状態です。それから『暴言』や『恫喝』が行われる。やってもいけないことで指導の対象となってしまう。それから、反省を求められたり謝罪を強制されたり、『誰かの名前を言うように』などを強要される。または、誰かが何かをすると連帯責任を負わされて、部活動の停止に追い込まれるという『いやがらせ』のような指導。指導中に「前にこんなことをやっていたよな」と、過去の事案を持ち出したりするとか。不釣り合いに重い罰則としては、例えば、美術の時間に使うかぼちゃをロッカーの上から廊下の真中に置いた、ということをやったとして、三人の教員に説教され、なおかつ部活に参加することを拒否され、『帰れ』と言われて、帰り道に首を吊って自殺してしまった、そんなこともあります。そして、生徒指導中に子どもを一人にしてしまったために、一人になった瞬間、その場にあった電気製品のコードで首を

吊ってしまうとか、学校から抜け出して行って鉄道自殺してしまうとか、そういうことも起きています。それから、ほぼ色々なケースに共通するのが、子どもに対する教育的配慮に欠けた拒絶的対応を行っている、ということですね。これをやったから必ず自殺するというのではないのですが、指導死の事案を見ていくと、こういった指導が行われている、ということです。

大貫さんによると、指導死は平成元年から29年の終わりまでの間に、78件起きているという。これは、教育評論家の武田さち子さんが新聞報道や裁判資料などから集計したものであって、実際にはこの倍以上の事例が起きているのではないかとする。その理由としては、指導死は、死の前に「指導されるような出来事」、つまりは教員に叱責されるような何らかの非違行為があったために、遺族からはなかなか学校側を批判しにくい、声を出して問題性を訴えにくいという事情があるからだという。

大貫さんは、「指導死を減らすヒント」として、78件の指導死事例のうち、叱られた際に子どもが「自分はやっていない」と訴えていた「えん罪型」が12件、指導の最中に子どもを一人きりにしてしまった「安全配慮義務違反型」が12件、そのいずれの要素も含まれていた事例が1件あったことから、「この25人の子どもは、教師が子どもの言い分をきちんと受け止めること、そして一人きりにしないという配慮をしていれば、死ななくても済んだはずなのです。こんなことを配慮するだけで、3分の1は防げたんです」と訴える。

大貫さんは、学校教育法11条に定められている「懲戒権」規定にも問題があるという。この「懲戒権」は学校現場では拡大解釈されており、「教員は、あるいは学校は、子どもに懲戒を加えていいんだ」、「懲戒を加えることこそが教育なんだ」というような、誤った解釈がされているのだという。しかし、教員が自分の判断で、その教育的な効果も検証されることなく、生徒に対して勝手に場当たりに懲戒を加えることで「私刑」となってしまうというのだ。

『「学校として、子どもを指導するのは当たり前だ』と言われるかもしれませんが。けれども事実として、78名の子どもが死へと追いやられている。この現実を見れば、改めて「指導」というものの意義を問い直さなければならぬということには明らかです。

最後に大貫さんは今後の指導のあり方としては、教員が「シフトチェンジをしていくしかない」とする。これまでの「子どものために」という立場は、きれいな

表現ではあるが、「子どもは劣った存在であって、大人に世話してもらわなければならない」という子ども観があるというのである。これを「子どもとともに」と変えることで、「子どもは十分な可能性を持った存在であり、そのことを支援してゆくことによって子どもは成長できるんだ」という視点に代わるのだという。

『「指導」を『支援』へ。このシフトチェンジがとても大事だということですね。』

最後に大貫さんは、自らが第三者調査委員会の委員を務めた、2015年に奄美市で起きた中学1年生の生徒の指導死事例について触れた。

「この報告書は、本文だけで107頁あります。その95%、もしかしたら98%くらいは、黒く塗っていません。必要最低限の部分以外は黒塗りしなくて済むような書き方を、6人の委員で相当工夫しながらやりました。なぜかという、これを日本中の先生たちに読んで欲しいからです。子どもたちにも読んで欲しい。教育委員会の人たちにも読んで欲しい。「何をすれば子どもを追い詰めてしまうのか」ということを、この報告書で学習して欲しい。」

その報告書は、奄美市のホームページから入手可能である。教員志望の学生、教職員には、是非一度読んで頂きたいと思う。

<https://www.city.amami.lg.jp/somu/daisansyaiinkai3.html>

## 参加者の感想

- 子どもの問題行動の指導は、もっとやり方を考える必要があると思った。言葉での指導であっても子どもの心はデリケートだと知ることができた。
- 教員の過度な指導による自殺、指導死の重大さが凄く感じられるお話だと思った。なぜ起こってしまうか、教員の懲戒権の濫用や両親からの教えに対して忠実に生きていく子どもの真面目さゆえの結果でもあると学んだ。“生徒のために”という外から見たらキレイな言葉でも意味をはき違えたら、本当に大きな問題になる。一方で私が感じたのは、子どもの軟弱化というのも多少背景にあるのではないかとする。その原因には過保護な親たちの存在もあると思った。だから、学校だけでなく、家庭も親身に向き合って行かねばならないことだと思う。
- 死なせたいからいじめるのではなく、こうして欲しいという先生の強い思いから逆に生徒を追い詰めて

しまったという話を聴き、自分がもし先生になったら大丈夫なのか、と思い直しました。生徒たちに「こういう人間になって欲しい。」「こんな大人に成長して欲しい。」という思いが誰にもあると思います。ですが、人はそれぞれ色々な人がいて、できることとできないことがあり、何でも強要してしまっはいけないことだと思います。子ども一人一人をしっかり見て、支えてあげられる先生になりたいです。

- ・指導者は、子どもの命を預かり、人生を大きく左右させる存在であると考えています。そんな存在である自覚と責任の低下が今回の指導死や近年の問題である体罰を生み出していると考えています。自身が放つ言葉や行動は子どもたちに大きな影響を与え、最善にも最悪にも導くという重要さがあり、それを自覚した指導者が必要であると考えます。
- ・教員が何時間も生徒に指導することに何の意味があるのか分からない。そこまで時間を使って注意することでもないのに、と思った。反省文を書かせたり、親を呼んだりすることなどは、絶対に必要なことではないと思う。きちんと生徒に理解させることが大切だと思った。

[Session 2]

人の魂を殺す「いじめ」一当事者の視点から

①神戸市立小学校いじめ・学校・教委による隠蔽事件  
《概要》

当時小学5年だった息子が1年あまりにわたって、言葉による精神的な嫌がらせや肉体的暴力などのいじめに遭ったうえ、金銭の恐喝被害を受けたが、学校と市教委はいじめ発覚後、様々な隠蔽や捏造を行った。「いじめ」事件が家族にもたらした壮絶な苦しみと、それに対する戦いの日々を、赤裸々に語って頂きます。

神戸市立小学校いじめ被害者  
父Kさんの講演

最初にKさんは、「神戸市教育委員会 『いじめ解消率100%』の疑問」と見出しが打たれた毎日新聞の記事をスクリーンに映した。神戸市はもう10年以上前から「いじめ解消率100%」を目標に掲げ、それを毎年達成していると謳っているのだという。

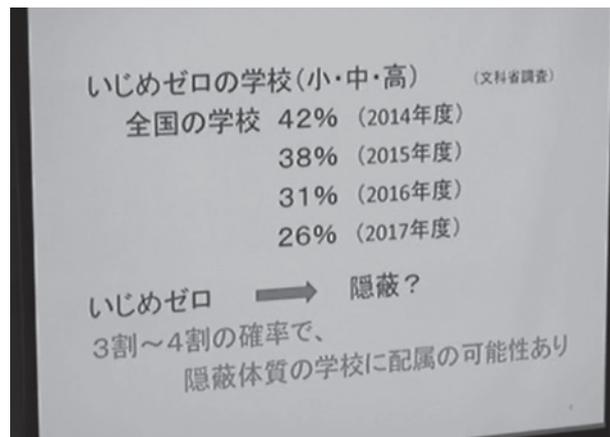
「これに対して毎日新聞は、『おかしいだろう』と指

摘しています。『子どもにきちんと向き合え』と、こういう記事を書いているんです。」

同市では、実は2年前に中学3年生の女の子が、いじめを苦に自殺をしたのだという。それでも「いじめ解消率100%」を謳い続ける神戸市に、Kさんは強い不信を持っているというのだ。

今年6月、新聞に「いじめ調査メモ 隠蔽指示 市教育委員会幹部、校長に」の見出しで、記事が大きく掲載されている。これは、いじめが発覚した際に学校が行った調査の資料を裁判所に提出するよう裁判所が求めた際、教育委員会が校長に「すでに破棄していて、存在しません」と「嘘をつくよう」指示していたということが明らかになったというのである。

「だから、神戸市は教育委員会や学校、もう組織的に『いじめはなかった』と、ずーっと嘘をつき続けていたということなんです」。



Kさんは、こうした隠蔽体質は神戸市だけの問題ではないと指摘する。文科省の調査では、全国の小・中・高等学校の3割から4割が「いじめはない」と答えているというのだ。

「ということは、3校に1校で、いじめがないんですよ。皆さん、小・中・高の時に『いじめはまったくなかった』ことって、ありました？ そう考えると、いじめを『ゼロ』と報告する学校は、『いじめを隠している』、隠蔽して嘘をついていると、そう考えるのが普通ではないかなあ、と思うんです。どういうことかということ、皆さんが大学を出て先生になり、学校現場に出た時に、3割か4割の確率でそういった隠蔽体質の学校に就職するということなんです。だから他人事ではないということで、是非お話を聴いて頂きたいと思います」。

次にKさんは、息子さんが13年前、小学校5年生の時に13名の生徒から「きしょい」「うざい」「死ね」「消

えろ」というような言葉による暴力、「K-1ごっこ」と称して殴る蹴る、廊下に引きずるなどの肉体的な暴力、持ち物への落書き、破壊、隠すなどの陰湿ないじめを受けたと語った。この時、金銭恐喝された金額は、総額約50万円にも上った。Kさんがようやく気づき、学校側に申し入れをした際、担任の教師は涙を流して「何も知らなかった」「これからはきちんと対応するので任せておけ」と言ったため、Kさんは一旦は安心したのだという。しかしそのわずか9日後には、担任は自己保身に走っていた。そして「きちんと調査し、対応する」と請け負った学校側は、被害者側には調査結果に基づきいじめを認めていたものの、加害者には「いじめではない」と言っていたのだという。

「要するに二枚舌を使ってるんですよ。で、どうしてそんなことをするかというと、いじめを認めようと、『いじめはありました』と、はっきりしますよね。だから加害者がいじめを認めない限りは、学校側はいじめを認めなくていい。そうすればいじめを『1件』とカウントしなくていい。そしたら、『いじめ解消率100%』が達成できる。こういう仕組みなんですよ。で、これは今も昔も続いているやり方なんです」。

いじめをなかなか認めようとしないう学校と教育委員会。Kさんは裁判に訴えるしかなくなった。裁判の結果を報じる新聞記事がスクリーンに映された。「学校がいじめ隠ぺい」「暴行、現金要求、仲間外れ」「加害者の親に賠償命令」「慰謝料を増額」と、判決は学校側の「いじめがあったかどうか分からない」という不誠実な説明を完全に退け、Kさん側の主張を全面的に認めたという。

## 2. 学校・加害者らがよく使う言葉

### ①「いじめられる側にも原因がある」



「これは『ジェントルハートプロジェクト』という、いじめ問題に取り組んでいるNPO法人が、全国の学校にアンケート調査をした結果です。教師の30%が、『いじめられる側にも責任がある』と回答したんですね。他方であるテレビ番組の調査でも、一般の人々のうち26%の割合で「いじめられる方も悪いんじゃない

いか」という意識を持っていることが明らかにされたという。

普通の子	いじめ被害者
1. にこやかな笑顔	1. ニヤニヤした顔
2. 親しげに話しかけてくる	2. なれなれしく話しかけてくる
3. オシャレで清潔感がある	3. 身だしなみに気を遣いすぎ
4. ちゃんと目を見て話す	4. ジロジロ目を見て話す
5. 落ち着いた	5. 暗そう

[https://twitter.com/kb\\_ogp/status/916997105150967808/photo/1](https://twitter.com/kb_ogp/status/916997105150967808/photo/1)  
 ※ツイート画像を一部改変

「でも、それって本当なのかどうか、ちょっと考えて頂きたいんです」。

上の表は、最近インターネットで話題になっていたものを改編したものだという。もともと、「女性たちに対して「第一印象の良い男性の特徴」と「第一印象の悪い男性の特徴」を聞いた結果を並べたもの」ことで、この表の「普通の子」が「第一印象の良い男性の特徴」、「いじめ被害者」が「第一印象の悪い男性の特徴」のアンケート結果に相当する。

「普通の子もいじめ被害者も、この2つは一緒なんです。つまり何が言いたいかというと、いじめる側は、いじめる理由を勝手に決めているだけなんです。だから被害者の側には何の責任もないんです。『にこやかな顔』と言えばいじめなくていいけど、いじめようと思えば『ニヤニヤした顔』となる。言い方を変えているけど、二つはまったく一緒なんだ。だから、いじめる側の都合で、いじめる理由を勝手に決めているだけなんです」。

「とにかく、加害者が勝手に理由をつくるんだから、避けようがないんです。だから、何にも悪くないのに勝手に言いがかりをつけられて、勝手にいじめられてるんです。でも世間の大人は、先生は、『いじめられる子が悪いんだ』と、そう決めつけてしまう。偏見なんです。だから皆さん、これから学校に行く時には、偏見を捨てて、是非教師・指導者になって頂きたい。これは、私からのお願いです」。

またKさんは、「冗談」「からかい」「悪ふざけ」「練習の一環」など、「この言葉を使うと、まったくいじめがいじめじゃなくなってしまう不思議な言葉」とする。

さらに、「恐喝を自主的に払った、という言い方にされてしまう」などのロジックを学校や教育委員会が使いがちであると指摘した。

Kさんは「日体生に期待すること」として、教師になった際、校長や教育委員会に「隠蔽しろ」と指示されたとしたら、「それは間違っています」と声を上げられなかったとしても仕方がないとしつつ、「こっそり被害者・遺族に本当のことを教えてあげて欲しい」とする。その理由は、被害者・遺族が学校側を訴える理由の大部分が「何があったかを知りたい」からだという。そしてさらに、「マスコミに内部告発をする」という方法もあるとして、「公益通報者保護制度」という制度を紹介する。これは、組織の内部の人間が組織の違法行為に気付いた際に、「不正義をただしたい」と考えてマスコミ等の「しかるべき機関」に通報する場合、国民に利益をもたらすということに鑑みて、その通報者を特定しないよう便宜をはかるといふものである。

最後にKさんは、息子さんがかつて裁判所に意見書として記した文章を読み上げ、参加者らに対し、「何かおかしいと思えば、その自分の勘を信じて、空振りを恐れず、いじめを止める」先生になって欲しいと結んだ。以下は、その意見書の一部である。

「どんなに辛いことでも終わりがあることがわかっていたら、人は誰でも我慢ができます。しかし、いじめにはその終わりがありません。誰も止めてくれません。誰も助けてもくれません。それならこの先、生きていてもしょうがないと考えるのが被害者です。(中略)」

「(中略) 終わりが想像できた時は我慢ができました。なんとか一人で耐えていました。しかし、それが一生続くと思った瞬間、生きる気力を失いました。ほとんどの被害者は私と同じではないでしょうか。」

「新聞の見出しに『いじめを苦しむ自死』。ニュースでは『いじめがエスカレートして自殺しました』とアナウンサーは原稿を読みます。でも、私は違うと思います。被害者は苦しいから死ぬのではなく、楽になりたいから死を選ぶのだと。」

## 参加者の感想

- 自分で正しいと判断でき、行動できる人になる必要があるのだと思った。教員のありかたを教えて下さりありがとうございます。
- お話の中で、印象の良い人と悪い人の話で特徴があまり変わっていないのは確かにと感じたし、いじめは理由があってしているわけではなく、偏見によって生まれているものなんだと知った。
- 仕事で忙しい教師は、いじめの対応は面倒臭い仕事であり、多数の加害者を指導するよりも1人の被害者を黙らせる方が簡単であり、どんどん学校は隠蔽体質になるという話を聞きました。最初は教師のことをとても悪く思っていましたでしたが、原因は教師だけでなく教師を取り巻く環境にもあることが分かりました。教師の仕事の量が改善されない限り、隠蔽体質の学校はなくならないのではないかなと思いました。
- 私もいじめを受けた時、絶対に親には言いませんでした。親を悲しませたくなかったのです。きっと同じ思いだったのかなと感じています。
- チームであるべき学校や教育委員会が、隠蔽するために協力をしてしまう。自分の学校にはいじめがないと発表したいがために、あるはずのことをなくしてしまう。本来の学校に絶対にあってはいけないことだと思います。一人で声を大にすることはとても難しいけれど、自分と同じ思いを持っている教員を見つけ、対応していきたいと思います。
- こうやって1校でもいじめを隠蔽する学校がある限り、世の中からいじめはなくならないと思いました。自分の「立場」を守るのではなく、本当に「子ども」を守っていかなければ、教員とは言えないと思いました。

## ②奈良県橿原市・「いじめ」自死事件

### 《概要》

同級生から仲間外れにされたり、LINEでいじめられたりした末、13歳の愛娘が自ら命を絶しました。教育委員会は、生徒らのアンケートからいじめの事実を認識しながらもそれを否定し、そればかりか家族の中傷を行いました。

辛く悲しい思いをしながら、「未来の先生」である皆さんに、大切なメッセージを伝えたい一心で、ご登壇頂きます。

## 奈良県橿原市・「いじめ」により 最愛の娘を奪われた母Mさん

「奈良県から参りました。子どもをいじめで失った遺族です。本日は、当初からのいきさつと、『何が問題であったか』ということをお話しさせていただきます。……『気づいて行ってきいや！』『行ってきます！』。これが、私と亡くなった娘の最後の会話です。」

Mさんは、「お帰り」と「ただいま」はワンセットでなければならない言葉なのだと言ふ。しかし、2013年3月28日、この日以降、最愛の三女の元気な「ただいま」を聞くことはかなわなくなった。

その日の朝、三女が起きてくるなり、突如「ママ、今日（部活の）試合やった」と言った。Mさんはまったく知らなかったので、「ママ、すぐにお弁当作るから。待ってて」と、急いでお弁当を作って持たせた。その時、娘は少し元気がないように見えた。

「何でその時、『何で元気がないの』って聞いてあげなかったんだろう。今でも、後悔しています」。

娘を送り出してから30分ほど経って、家の電話が鳴った。嫌な予感がしたMさんが電話を取ると、学校の先生が三女の名前と「転落」という言葉を伝えてきた。Mさんはすぐに「転落場所」として伝えられた住所に、夫とともに車で向かった。その途中、夫の携帯に電話がかかってくる。やはり、学校の先生であった。今度は、県立医大に向かうように指示された。

「私はもう、体中震えました。もしかしたら、全身骨折してるかもしれん。もしかしたら、車いす生活になるかもしれん。大丈夫。私がみる。私が一生車いすを押す。そんなつもりで車を走らせました」。

病院に着くと、懸命の救命活動が続けられていた。しかし、医師は非情にも「お母さん、もう無理です。」と告げる。Mさんは、状況を理解することができなかった。

「何が原因で亡くなったか。何が原因なのか、考えられる状態ではなかったです」。

そして亡くなった翌日、突然三女の友達の母親がMさん宅を訪ねてくる。

「私、その時思考回路がすべて停止していたので、『どうぞ』と対応しました。そうしたら、『自らあんなことをする子じゃない。チョウチョか何かでも追いかけて、落ちたんじゃないの。平均棒で遊ぶような感じで落ちたんやろ。お花畑に飛び込むように落ちたんじゃないかな。ね、そう思ってあげて、ね』。でも思考回路の停止している私は、『何を言ってるんだろう、この人』と、ただた

だボーッと聞いていたんですね。後に分かったことが、この保護者が実は、加害者の母親だったんです。この時から、学校、地域、混乱した状態になりました」。

三女は、この保護者の娘を含めたクラスメイトから無視や仲間はずれ、空気のように扱われる、などのいじめを受けていた。それだけでなく、同じ部活でも仲間外れにされたり、先輩からラケットで叩かれる、押されるなどの暴力を受けていた。さらに亡くなる10日ほど前に、別のクラスの生徒からLineで存在否定するようなことを言われていた。これらのつらい状況に、三女は二重、三重に直面していたのだ。

「そういったことも最初は分からず、部活での暴力があったことはちらっと耳に入っていて、『何とかして下さい』って学校に言っていたんですけど、クラスのいじめであるとか、部活で一人でぼつんとしているということは、知らなかったです。ただ、そういったことを知っていたお友達が、うちの家に来てくれました」。

Mさんが事実を知った時、学校や教育委員会は謝罪するどころか、記者会見を求める記者クラブに対して「家庭が悪い」「虐待があった」などと中傷する言葉を口にし、「だから、そっとしておいてあげて欲しい。報道しないでやって欲しい」と伝えていた。そして、地域全体にそうした噂が広まった。ここで、学校・教育委員会との対立が決定づけられた。

そうした中、娘の死から1ヶ月経たないくらいの頃、担任の先生が訪ねて来た。Mさんはさすがのような思いで「私たちには学校での様子が分からないんです。学校で娘はどんな生活をしてましたか？」と尋ねた。教育委員会は記者に対して「三学期から様子がおかしかった」と漏らしていた。「それもお聞きしたいです。どんなふうにおかしかったんですか？」。

「先生は、『Aさん、Bさん、Cさんから仲間外れにされてました。グループから外れてました』と言いました。私は最後まで聞こう、と震える体を押さえながら聞いていました。『どんな様子やったんですか？』『一人でぼつんとしてました。休み時間、机で突っ伏して寝ていました』。他にも何か聞いたんですけども、最後まで話を聞いてから、先生に抗議しました。『先生、娘の性格をよく分かってきてますよね。明るいし、天真爛漫やし、そんな子が一人でぼつんとしている。休み時間に一人で寝ている。明らかにおかしいじゃないですか。先生！』。…先生は、そこから黙りました。この日から学校、教育委員会はこの先生をうちに連れてこようとはしませんでしたし、一切ガードするよう

な形になりました」。

とにかく「娘に何があったのか知りたい」Mさんたち家族。学校側に何度調査、説明を促しても一向に何もしてくれない。悲しみのまったく癒えない苦しい中、4月23日に、Mさんは意を決して校長室を訪れた。何があったのか調べて欲しいと懇願するMさんに対し、教頭は「(いじめの)証拠がないと調べられない」と、冷たく言い放った。そして生徒指導の教諭は、Mさんと一時間ほど話した挙句、「いじめられる側にも原因があったんじゃないですか。娘さんにも原因があったんじゃないですか」と言ったのだという。当然、Mさんは愕然としつつも、ぼんやりと「いじめって、分かってるんやなあ」と思ったという。

学校は、一人の生徒の命を何だと思っているのか。途方に暮れるMさんを、部活の顧問の先生が訪ねて来た。そして意を決して「実は」と、部活での三女の様子を話してくれたのだという。

「部活で一人でぼつんとしていた。一人でお茶を飲んでいて。口数が少なくなった。人としゃべらなくなった。『本当は、あの亡くなった日の夕方に、お母さんに電話しようと思ってたんや。』そう言われました。そこまで言って下さったんですね。で、週に1回、2回でしたが、長いときは2時間、3時間、家族の話はずーっと聞いて下さいました」。

この教諭は何度も話をしに家を訪れてくれ、徐々に家族と心を通わせ始めていた。Mさんは「ああ、ちょっと人を信じていいかな。こんな先生もいてるんや」と、救われた気持ちになったという。しかし、その教諭は、次の年から違う学校に異動させられ、強制的に関係が断たれてしまう。Mさんは、「これが教育委員会のやり方なんや。本当のことを言ったら、こういうことをされるんや」と、ただただ悲しかったという。

調査委員会も、市が委員を恣意的に選定した。納得のいかなかったMさんは一切の協力を断り、様々な原因が重なったことで、調査は行き詰まった。その後、Mさんも納得できる調査委員会が再設置され、提出された調査報告書には、「仲間外し、無視、嫌なことを言われるなどが断続的に行われ、対面の言葉や行為だけでなく、Lineを使う方法もされており、これらによって『心身の苦痛を感じていた』とされ、相当程度の心理的苦痛を与えられていたことが優に認められる。そして、学校はいじめの継続を放置し本生徒の孤立感を深め、教師の誰一人として向き合って話し合おうとしなかった。そして、それを母親に連絡、報告すべきで、

それによって本生徒の自死を食い止める手立ての一つになり得た。」と書かれていた。

学校側は当然、三女の異変に気付いていたはずであった。

「学校は知っていたんだったら、教えて欲しい。教えてくれていたら、何らかの形で対応ができたし、娘は今も生きていたと信じています。『親と情報を共有する』、たったこれだけのことで、防げたはずの死なんですよ。これが、今日皆さんに一番伝えたいことなんです」。

様々な学校事故がある。いずれも、子どもたちは教師に対して大きな警鐘を鳴らしながら、命を失っている。体に怪我をしたら、先生たちは保健室に連れて行く、病院に連れて行く、親に連絡する、などの迅速な対応を取るはずだ。Mさんは、次の言葉で講演を結んだ。

「いつもの友達と一緒にいなくてぼつんとしている、提出の用紙が破れている、いつもと違った様子で元気がない、泣いている、このような心理的な兆表行動を捉えたら、異変と気づいて、対処してあげてほしいんです。体からは血を流していないんですけど、心からは血を流しているはずなんです。体の異変と同じように、病院に連れて行くレベルなんです。保健室に連れて行く、親に連絡する、そういった対応をして欲しいです。そして、先生一人で抱え込まず、学年や学校全体で共有して欲しいです。…皆で情報を共有して、「どうか助けてあげようよ」という、そういった姿勢を見せてあげれば、亡くなった被害者の子どもたちの心も救えると思うんですね」。

## 参加者の感想

- 今日、この話をきかせて頂いて、クラス内の異変に一番初めに気付けるのは担任の先生なんだと改めて実感しました。また、早くに気付いても何か行動に移さなければ何の解決にもならないし、むしろ状況を悪化させるだけなんだと思いました。
- 話を聞いて、すごく心を打たれ、目に涙があふれました。なぜ周りはいじめを見ていたのに、何もしてあげなかったのか。学校はなんで何もしてくれないのか。絶対私は許したくない。見ていれば、いつもと違うことなんか分かるはずだし、何でその時に声を掛けなかったのか。私は、1人でも命を救えるように、助けてあげたいと思いました。
- いじめ問題は決して消えない。私たちはいじめに対

して正面から向き合わなければならない。今の教員にはいじめや体罰をみて見ぬふりをする者がいる。私は先ず、いじめをなくすのではなく、見て見ぬふりをする教員をなくすべきだと考える。まずは教員から変えなければ生徒も変わらない。いじめをなくすと言っている教員はあまり信用できない。まずは自分を見つめ直せと思いながら、そのような教員を見ている。私は先ず、生徒と積極的に接し、生徒たちが話しやすい環境を作りたい。見て見ぬフリをする教員ではなく、生徒たちと正面から向き合い、生徒との信頼を深めたい。そのために大学生活をしっかり送り、立派な教員を目指す。

- 今回は貴重なお話をありがとうございました。正直このような話を聞く機会は数少ないので、いじめについて深く考えるきっかけとなることができました。いじめの悲惨さというものを今日改めて実感しました。
- 学校の対応があまりにひどすぎて怒りが込み上げてきました。最近も学校や教育委員会の隠ぺいについての問題のニュースを耳にします。尊い命が奪われているにも関わらず学校側の対応には驚きを隠せません。今もなおこのような問題が完全にはないとは言えません。自分に何ができるのか、大学生活4年間で多くの知識を得て、このようなことが二度と起こらないような後押しをしたいと強く思いました。
- “いじめ”は絶対に見落としません。一瞬一瞬の生徒一人一人の表情をしっかり見て、少しでもあれ？って思ったら絶対声を掛けます。絶対に。心と体と救護できる教員になります。大変、とか、時間が～とかの言い訳ではなくて、その一瞬に向き合います。本当に多くの学びがありました。今現在の教員生活で絶対に忘れません。

(報告：南部さおり)